

ル チェ ル ン の 夏

My Pleasant Summer in Lucerne

沢 村 千 栄 子

どこをとっても、絵になるスイスの中でも最も美しい町として知られているルチェルンで毎年8月10日頃から1ヶ月間音楽祭が催され、この期間中は静かで人口も少ない町が、各地から演奏会を聴きにやって来る人々で、どのホテルも満員になるほど賑う。この音楽祭はヨーロッパでは最も有名なザルツブルグと並んで権威のある大規模なもので、そこに招かれるということは、演奏家にとっては大変名誉なことで、連日連夜素晴らしい熱演が繰りひろげられる。

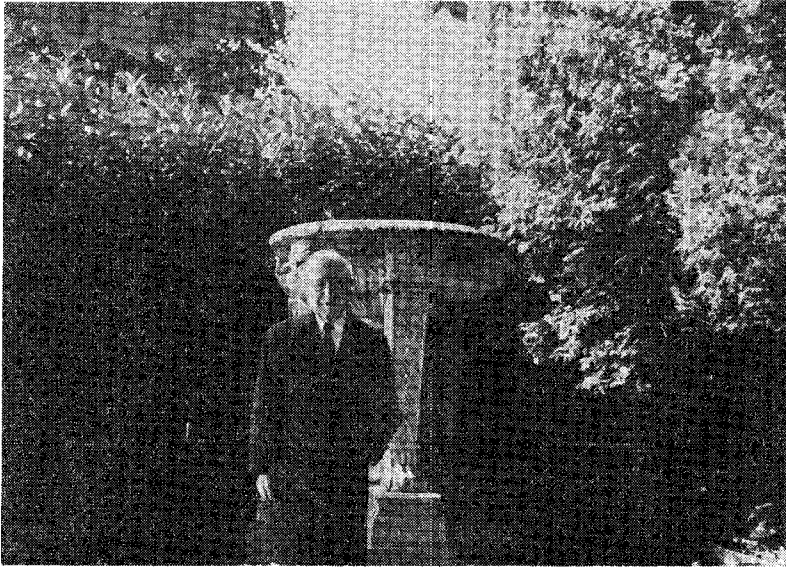
(同じ演奏家でも日本に来るとホールの響きが違うのか、長旅の疲れでベストの状態では演奏できないのか、又はこちらの聴く態度が悪いのか、全然異った印象を受けることが屢々あるが)。

今年聴いた全部のコンサートをここで取り上げることは出来ないが、ピアノに関してのみ少し触れてみたいと思う。先づゲルバーが登場して、今までに聴いたことのない新鮮な解釈で、しかもごく自然で、ダイナミックな「皇帝」を演奏して素晴らしいオープニングを飾った。続いて、今年80歳になるクラウディオ・アラウが夢見るような「告別」、正に情熱的な「熱情」、それにこんなにロマンティックで、美しい曲であったのかと改めて感激させられたリストの「ソナタ」、最後に彼の若さとエネルギーで躍動感に溢れる「ダンテソナタ」を演奏した。これだけのプログラムを聴いても、何と短く感じられたコンサートであったか!!次に専ら指揮者として大活躍で、最近では時々コンツェルトを聴くことしかできない、パレンボエムがベートーベンの後期のソナタ4曲から成るリサイタルを開いた。以前から彼の演奏には強く惹かれるものがあったが、目のさめるようなテクニックと美しい音色、それに繊細でいて大胆な今回のベートーベンを聴いて、ピアニストとしての才能を再認識させられた。もう一つ私の先生でもあるミエチスラフ・ホルショフスキーのプログラムはバッハの「イギリス組曲」に始って、ショパンの「ポロネーズ」と「マズルカ」、ドビュッシーの「子供の領分」、最後にベートーベンの「告別」というものであった。その演奏は人間味あふれる暖い人柄そのもので、流れるような自然なテクニックで音楽を自由自在に操り、聴く者を別世界に連れて行ってしまふ。先生の演奏を聴く度に90才を越えている人の音楽とは思えない感覚の瑞々しさに打たれ、90年間、磨かれた輝くばかりの音色に酔い、忘れがちなピアノの素晴らしさを再認識させられる。

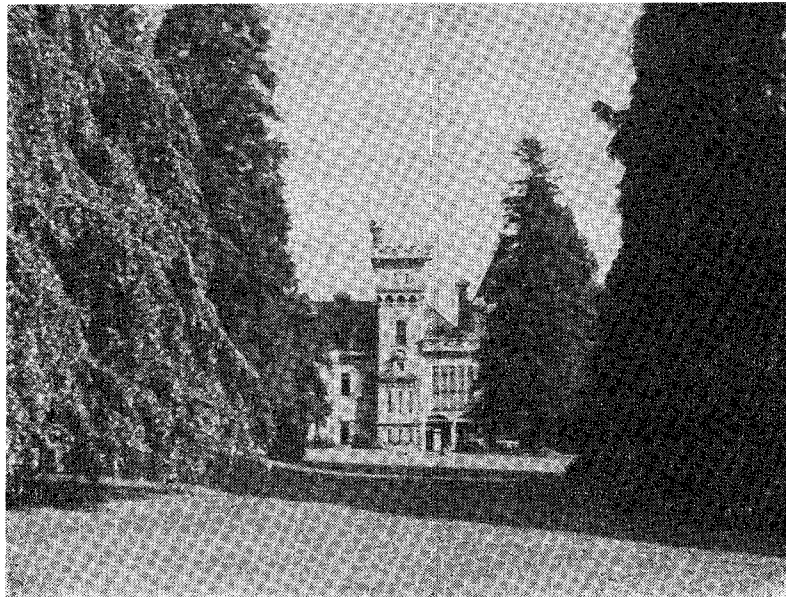
この音楽祭と同じ期間にルチェルン音楽院において指揮、声楽、ヴァイオリン、チェロそしてピアノのマスタークラスが開かれる。講師は超一流のメンバーで、レッスンには世界各国から

ルチエルの夏

数多くの生徒が集まってくる。ピアノは先に述べたホルショフスキーが1972年以来毎年アメリカから教えに来ているが、先生は1892年ポーランドで生まれたユダヤ人で、今も演奏活動の傍らカーティス音楽院の教授を務めている。80歳になってからのバッハ「平均律」のレコードは素晴らしいし、日本でもカザルスとのデュオ、その他数多くの室内楽のレコードで有名である。ピアニスト誰もが死ぬまでピアノを弾いていたいと望むのは当然であるが、先生が90歳まで第一線で演奏できるということは、若い頃からスポーツマン、アルピニストとして身体を鍛えた



ホルショフスキー先生



ルチエルの音楽院

ルチェルンの夏

こともあるが、普段から「年をとって怠けると筋肉がすぐに固くなってしまふ」と言われ、毎日数時間の練習を欠かされないからだと思う。昨年も先生のリサイタルの次の日、会った時に「昨夜は早く寝られましたか？」とたづねると「いや、練習をしていた」と答えられびっくり仰天してしまった。

マスタークラスで取り上げられる曲は予め決められていて、その中から適当に選んで数曲を持って行くのであるが、短期間に楽譜から研究して暗譜までするのはなかなか容易なことではない。先生はいつもオリジナルの楽譜に忠実でなければならぬと教えられ、それさえ出来ていけば生徒の曲に対する解釈を尊重し、演奏がより良いものになるようアドバイスされるだけである。テクニックに関しても先生自身が「自分は50年ピアノを弾いた頃から、楽に演奏することができるようになった」と言われる程で、それは自然に体得できると考えておられるのか、生徒はレッスン中に横で弾いて下さるのを見て、その素晴らしいテクニックを必死に盗んで勉強するしかない。レッスン中にその曲に関する数々のエピソードを聴くのも楽しいし、とても参考になるが、何よりも弾いて聴かせてもらえるのが勉強になる。どんな曲でもバリバリと暗譜で素晴らしく演奏され、レッスン中であることも忘れて聴きほれてしまう。先生のレッスンは私には、どんなコンサートで弾く時よりも何もかも見透かされてしまうので恐ろしいが、日頃の勉強不足を痛感し、音楽に対する姿勢の甘さに恥入ったり、たまには先生の嬉しそうな顔を見て勇気がわいて、新たに勉強しようというエネルギーが与えられる。1年に一度の貴重な時間である。6年目のルチェルンの夏も充実したものであったが、可能な限り毎年続けて行きたいと願っている。

今回は特に父兄会より海外研修費補助を受けたことに対して、深く感謝する次第である。